

卓 話 集

平成 20 年 2 月 20 日

担当：苅谷会員・服部会員

『南大門焼失と思い出』 苅谷 二郎会員



10日前にソウルの「南大門」が燃えました。600年前の朝鮮王朝時の建造物で、韓国の国宝第一号に指定されており、ソウルには「南大門・東大門」があります。日本では、足利義満時代である「金閣寺」(京都)・「道成寺」(東京/芝)と同一時期に建造されている。パリの凱旋門と大きく違い、韓国・中国などその都市周辺は頑固な城壁に囲まれ、外部からの進入を防ぎ、東西南北には出入口である門がありました。時代の流れと共に、人口が増え城壁内は次第に狭くなり生活に支障が出てきたことで、やむなく城壁を取り壊したが、その「門」のみが残った。

しかし中国・西安には現在も巨大な城壁が残っており、同様な「門」も東西南北に存在している。(昭和20年8月16日の終戦の翌日に、南大門前広場にて日本軍憲兵が、朝鮮人の暴徒により撲殺された事を思い出された)

当時日本は戦時中であり、満20歳になる男子は「徴兵制度」があり、私も昭和19年春に徴兵検査を受け「第一乙種」にて入隊し、入隊後は初年兵教育、過酷な訓練でありました。

「上官の命令は、天皇陛下の命令と心得よ」「一切、問答無用」夜間点呼の際は全員「ビンタ」があった時代であり、当時の学校でも上級生が下級生を「教育」として「なぐった」時代でもありました。

新兵教育から逃れたいこともあり、19年夏に「陸軍航空技術候補生」の制度があり専門学校、大学理工学等の卒業生を対象に、全国から300名を試験採用があり、試験に合格いたしました。各務原に「陸軍飛行学校」があり、入校の即座に「見習い軍曹」・その二ヶ月後には「見習士官」また二ヶ月後には「陸軍航空技術将校」になる。短期の将校つくりのため、大変厳しい訓練でありました。(しかし暴力的な訓練はなかった)相撲界/時津風部屋のような「リンチ」はありませんでした。

2月1日に任官し北支(中国北部)に展開する空軍、「第五航空群司令部」に配属される。豊橋に在った「陸軍飛行場設定司令部」にて業務を遂行した。2月15日夜、200人編成の3隊を持ち直行列車にて下関へ向かい、輸送船(6000t)で韓国(釜山)へ行く。(列車は灯火管制の中)当時日本海・対馬列島辺りは、米軍の掌握化にあり潜水艦などが多くおり、いつ攻撃されるか解らない情勢でありました。その為島の周りをぐるぐる回りながらの航行であった。

なぜその様な行動をするかと言うと、敵潜水艦にて攻撃され沈没した際に「海へ飛び込み最寄の島へ泳いで非難せよ」との事でありました。(その為普段の3倍の時間がかかった)そんな中「全員、甲板へ上がれ」との命令があった。しかし冬の日本海の荒れ方は想像を絶するものがあります。私はどうせ死ぬのならと思い、船室に留り手足をのばし寛いでおり寝込んでしまった。後、上官に叩き起こ

されて叱られた。

潜水艦から逃れ、ようやく釜山港に到着した。列車にて釜山からソウル・ピョンヤン・などを經由して満州・奉天方面へ。途中毛沢東率いる八路軍（現在の中国軍）の襲撃を受けるが、被害は少なかった。無事到着後、飛行場担当の命令を受け3つの設定隊が各飛行場を担当することとなった。私どもは、青島の飛行場を受け持つこととなり5月末まで駐留していた中、八路軍や米国の襲撃は何度もありました。

米軍の最新鋭機である「P38型機」の飛来は絶えずありましたが、朝鮮でも中国でも一切爆弾は落としてなく、機銃掃射の攻撃のみであった。私も機銃掃射を受けローラーの影に隠れ逃げのびたり、八路軍の攻撃もあり、いろいろな事がありました。

ある日、指令部よりの「すぐに帰れ」との命令を受けて戻ると、簡単に身支度をして済南駅に集まれとのこと、済南駅には司令官・将校の6名が待っておりました。列車に乗ったが行き先は不明のままで、何処へ行くのか解らず・・・翌日着いた所がソウルであった。

米軍による日本本土攻撃の為、「済州島に上陸する」との情報が入り、そのため北支に展開中の第五航空群全て移駐するとの為、我が隊は先遣隊としてソウルの空港を整備せよ！との事であった。・・・・・・・・

私の思い出の中では、様々な苦勞がありました。どんな難問でも「命を掛けて」立ち向かえば、何らかの道が開ける。私の人生には、大変プラスになりました。

「本日正午に重要な放送がある」との事、全員整列しラジオの受信機に耳を傾けるも雑音がひどく、何を言っているのか解らないため、司令部に確認の連絡をとる。隊長が司令部よりもどり、悲壮な顔と・ホットした顔が感じられました。「戦争が終わった・日本が負けた」・・・・・・・・

作戦用務令により状況が一変した場合は「上司の指示を受けよ」指示にて設定隊のトラック20台に兵器、人員を乗せて陸路でソウルへ向かう。宿舎ではお世話になった日本女性の仲居さんにお礼品を渡し、列車にてソウルへ向かう。・・・

ソウルに着くと、街中の群集が戦勝祝賀の手旗を振り「ほたるの光」の大合唱であった。出迎いのトラックで帰る。翌日には、暴動が発生し日本人商店の品々を略奪が始まった。しかし命令は戦闘は継続するとのことであり、町々では武装歩哨が立ち、道路は戦車等が走り回っている為、人の姿は無く閑散としている。

翌日、金浦空港に最新鋭航空機にて、日本から三笠宮殿下がこられ「天皇陛下のご命令」を伝え帰国された。司令部の昨日の命令は撤回するとのこと・・・・・・・・

私の終戦は8月15日では無く、8月17日であります。11月中ごろに釜山より復員船にて帰国。